

論文の和文要旨

論文題目

酒井和也とラテンアメリカの「新たな芸術」
——帰国二世アーティストの移動と表現——

氏名

高木 佳奈

本論では、アルゼンチン、メキシコ、米国で画家、翻訳家として活躍した帰国二世アーティストの酒井和也（1927-2001）を取り上げる。帰国二世とは、アルゼンチンで生まれた二世のうち、日本で教育を受け、その後帰国した者のことをいう。酒井は1927年にブエノスアイレスで生まれ、小学校から大学中退までを日本で過ごした後、アルゼンチンに帰国し、画家、翻訳家としてデビューした。古典から現代文学まで幅広い日本文学作品をスペイン語に初訳した他、日本文化の紹介にも努め、文化団体の設立、雑誌の出版、講演活動などに携わった。画家としてはラテンアメリカのみならずヨーロッパ、北米の展覧会に出品し、高い評価を得た。1963年にメキシコに移住し、メキシコ学院大学などで日本文学を教える傍ら、オクタビオ・パス主宰の雑誌『プルラル (*Plural*)』の編集長を務め、メキシコ文化を牽引する存在となった。1976年からテキサスに移り住み、ラテンアメリカ出身のアーティストとしてテキサス大学ダラス校などで美術を教え、晩年まで精力的に絵画を描き続けた。他にグラフィックデザイナー、美術・音楽批評家、ラジオパーソナリティとしても活躍した、多才なアーティストである。

酒井について語られるとき、必ずと言っていい程その出自に言及されるが、日本時代については不明な点が多い。また酒井の帰国二世としての経験が作品にどう影響しているのかという点も先行研究では明らかにされていない。そこで本論では、日系移民研究とラテンアメリカ文化研究の両面から作品分析を行い、エスニックマイノリティであった酒井がラテンアメリカでどう受け入れられたのかという観点から考察を行った。

また酒井の多彩な活動を網羅した先行研究は存在せず、それぞれの活動がどう関連していたのかについても明らかにされていない。本論は「新たな芸術 (*Nuevo Arte*)」という概念に着目し、酒井の絵画と翻訳・日本文化紹介に共通して見られる表現について考察する。「新たな芸術」とは、酒井が関わった「新たな絵画 (*nueva pintura*)」と呼ばれる芸術運動や、日本文学を紹介する際に酒井が用いた「新たな文学 (*nueva literatura*)」を総称して本論で用いた言葉である。酒井が目指した「新たな芸術」とは具体的にどのようなものだったのか、そして酒井は何に抵抗し、何を壊そうとしていたのかを明らかにする。酒井を通じて、1950～70年代のラテンアメリカ文化が抱えていた葛藤と、酒井をはじめとするアーティストたちが追求したラテンアメリカ文化の可能性を探ることが本論の目的である。

本論は3部構成となっている。

酒井の経歴について論じた第1部「二つの海——日本語とスペイン語、文学と絵画——」では、これまで詳細が不明だった酒井の両親や日本時代について、遺族へのインタビューや新たな資料をもとに明らかにした。二世として「日本人でもあり、アルゼンチン人でもある」と感じていたにもかかわらず、戦時下の日本で皇民化教育を受けた酒井は、自分は何者なのかと問い続けてきた。終戦後アルゼンチンに帰国すると、自らのルーツを模索するために日本文学の翻訳と日本文化紹介を行い、自己表現の手段として、絵画を制作した。アルゼンチンからメキシコ、テキサスへと移動を続け、常に表現の開拓を続けた彼の多彩な活動は、各分野に重要な足跡を残している。

第2部『「新たな絵画」への挑戦』では、アルゼンチンでのデビューから晩年までの絵画作品を時系列で論じた。酒井の絵画がラテンアメリカで受け入れられた背景には、ラテンアメリカ文化の起源とオリジナリティをめぐる議論があった。アーティストたちはラテンアメリカ文化とは何かという問いに直面し、ラテンアメリカ文化の起源を土着文化に求める立場と、ヨーロッパ文化に求める立場の間で対立が見られた。それに対して酒井は、日本をはじめ欧米やラテンアメリカの様々な文化を取り入れて独自の表現を追求し、「新たな絵画」の創造を目指した。「模倣から創造が生まれる」という考えに基づき、あらゆる文化を用いて自らの表現を生み出してきたが、それは日本の伝統であると同時に、多くの移民を受け入れて発展してきたアルゼンチンの伝統でもあった。

書や禅の思想を取り入れた初期の作品は、アルゼンチン・アンフォルメル先駆けとして高く評価された。アルゼンチンは当時自国文化の輸出を進めており、日本にバックグラウンドを持つ酒井の作品は、アルゼンチン美術の多様性の証として積極的に紹介された。1960～70年代を過ごしたメキシコでは、国家の支援を得た壁画運動が圧倒的な影響力を誇っていたが、ナショナリズムの傾向が強くなっていた同運動と距離を取り、「新たな絵画」を模索する動きが生まれていた。酒井もこうした動きに加わり、「ルプトゥーラ (Ruptura, 「断絶」の意)」の世代の一人として活躍した。また琳派の曲線美とジャズや現代音楽のリズムを幾何学的抽象で表現した作品で高い評価を受け、「ヘオメトリスモ (Geometrismo)」と呼ばれる芸術運動を牽引した存在として知られている。またメキシコオリンピックと平行して開催された官展に対抗し、アーティストの自立を守るために「サロン・インデペンディエンテ (Salón Independiente)」を立ち上げた中心メンバーでもあった。テキサスに移住後は日本の伝統美術を独自に解釈し、自らのスタイルに「翻訳」したともいえる作品を数多く残している。

酒井の翻訳について論じた第3部「心の中の『日本』を探して——翻訳・日本文化紹介——」では、解説や作品選定を分析し、酒井がどのように日本文化を発信したのかを明らかにした。酒井は日本近現代文学に、東洋と西洋、伝統と近代といった一見相反する二つ

の要素の融合を見ていた。ヨーロッパ文学の手法を用いて王朝物を書いた芥川龍之介。米国による占領と「民主化」の混乱の中で生み出された戦後文学。現代を舞台に謡曲を執筆した三島由紀夫。抽象的な表現の中に、満州での個人的な体験を描き出した安部公房。これらの「新たな文学」は、日本とアルゼンチンという二つの文化を受け継ぎ、その葛藤を乗り越えようとしてきた酒井にとって、新たな表現の可能性を示すものであった。

酒井はアルゼンチンの文芸雑誌『スール (*Sur*)』と、編集長・グラフィックデザイナーとして参加したメキシコの雑誌『プルラル』の両誌に翻訳を掲載しており、ラテンアメリカにおける日本文学普及の重要な局面に関わっている。酒井が精力的に翻訳を行った結果、ラテンアメリカではそれまであまり知られていなかった日本文学が広く読まれるようになった。近現代文学のみならず、『源氏物語』、『枕草子』、『雨月物語』といった古典作品や謡曲も幅広く翻訳し、メキシコ大学院大学などで学生の指導にもあたった。その翻訳は単なる紹介にとどまらず、作家研究に重要であるとして芥川龍之介の「歯車」をいち早く翻訳し、古典文学の翻訳では独自の解釈を取り入れるなど、独創的な活動を行った。また翻訳と並行して美術、宗教、演劇といった様々な日本文化をスペイン語で紹介したが、こうした活動の裏には、マイノリティとして生き、オリエンタリズムと闘ってきた経験から、多様な日本の姿を伝えたいという思いがあった。

以上の考察の他に、先行研究をもとに酒井の画業、翻訳業における業績を整理し、新たな情報を追加してまとめた。また酒井の実弟や、酒井と交流のあった日本文学者のドナルド・キーン、画家のビセンテ・ロホ、外交官の伊藤昌輝にインタビューを行い、補遺に抜粋を掲載した。

以上、酒井の活動を包括的に考察した結果、翻訳・日本文化紹介と絵画制作には「新たな芸術」の追求という共通のライフワークがあったことを明らかにした。それは様々な二項対立を乗り越えた表現の模索であった。日本文化のみならずヨーロッパ美術やポップアート、ジャズなどのあらゆる文化を取り入れて生まれた作品は、土着／ヨーロッパの対立に疲弊したラテンアメリカ美術に対する酒井の答えであった。抽象絵画でありながら琳派を連想させるヘオメトリスモの作品は、抽象と具象の境界を越境するものである。また数多くの翻訳を行った日本文学は、西洋と東洋、伝統と近代の相克を超越する可能性を示す「新たな文学」として紹介された。帰国二世として育ち、「日本人でもあり、アルゼンチン人」でもあると感じていた酒井は、異なる二つの文化を持つことは矛盾ではなく、むしろ豊かな創造性につながることを証明してみせた。

更に、酒井が求めた「新たな芸術」とは、分野を越境した表現でもあったと言える。美術、文学、音楽を横断し、複数の表現手段を用いて相互的に創作を行った点が酒井の醍醐味であった。その最たる例が、琳派の伝統を受け継ぎ、ジャズからインスピレーションを

得て作曲するように描かれたヘオメトリスモの作品群である。酒井は各分野で古いものから学び、新しいものを取り入れて「新たな芸術」を生み出してきたマルチアーティストであった。

酒井は日系人というエスニックマイノリティでありながら、ラテンアメリカ文化の中心で活躍し、そこに確かな足跡を残した稀有な存在である。美術、文学、音楽といった多分野で活躍し、日本とラテンアメリカの架け橋となったという点でも、他に類を見ない多才な人物であった。本論では、酒井和也という一人のマルチアーティストの視点から、戦争に翻弄された日系移民の歴史や、20世紀後半のラテンアメリカ文化のダイナミズムについて再考した。酒井の地域、言語、分野を越境する作品を理解するためには、枠組みにとられない多角的な視点が必要であり、本論は酒井の活動について、学際的かつ包括的な考察を行った。